

ジャネッタ氏の誤りのままである。したがって、国内での種痘伝来に関する史料を確認する必要がある。その手がかりが、柴田方庵『日録』（日立市郷土館）である。

同『日録』には、「(嘉永二年六月)廿四日、朝曇 昨廿三日蘭船入津日暮頃碇御□、咬啣吧(ジャガタラ)者五月十九日出帆、洋中三十五日ニ而入津之由、岩瀬氏咄ニ而承り候(下略)」とあり、嘉永2年6月23日に蘭船が入港したことが記されている。これが牛痘痂をもたらしたスタッド・ドートレヒト号をさすと考えてよいだろう。同『日曆』には、6月26日にはそれらしき記録がないが、7月7日に注目すべき記事がある。「(七月)七日 晴 此節牛痘種持渡何之上外科阿蘭陀人植付方仕、追々外小児江植次候義心切ニ世話いたし様□奉行所よりも御沙汰ニ相成候処

……」とあり、7月7日にはすでに、種痘が成功してうまく続くよう、子どもらを世話してほしいとの奉行所の沙汰があった。植林家累代記録にある7月17日に建三郎らを出島につれていって、初めて接種したというのは誤りであることがよくわかる。柴田方庵のもとへ7月16日に種痘をしに来なさいという通知が来たが、実際には、7月24日で方庵はこの日初めて種痘の伝授をうけた。以後、長崎での種痘は、8月1日、8月8日、8月15日、8月22日と、7日ごとに確実に接種されている。これを逆算すると、7月17日、7月10日、7月3日、6月26日となり、最初の接種日が6月26日と確定できる。以下、種痘伝播における2, 3の問題も合わせて報告する。

(平成28年12月六史学会合同例会)

江戸時代までに渡来したヨーロッパ医学の実像

坂井 建雄

ヨーロッパの医学は16世紀中葉に日本に渡来し、幕末のポンペによる医学伝習に至るまで、書物の輸入と翻訳、あるいは医師による診療・教育という形で日本の医学に影響を与え続け、明治以後の本格的な移植へとつながった。この間のヨーロッパの医学の実像はどのようなものであったか、また日本にはヨーロッパの医学の何が伝わり何が伝わらなかったのか、これを明らかにするのが今回のテーマである。

18世紀以前のヨーロッパの医学教育では、4つの主要な教科が教えられていた。第1の医学理論は、医学の理論的な基礎を教えるもので、その教材としてはサレルノ医学校で編まれた『アルティセラ』(11世紀頃成立)とアヴィセンナの『医学典範』(12-13世紀にラテン語訳)が当初よく用いられた。16世紀中葉にフェルネルが医学理論書として『医学』(1554)を著し、その後医学理論書が次々と書かれ、その多くは『医学教程』の表題をもち、①生理学、②病理学、③徴候学、④

健康学、⑤治療学の5部門に分かれていた。ゼンネルトの『医学教程』(1611)は最も整備された医学理論書で、伝統的なガレノスの体液説に基づく生理学が述べられていた。プールハーフェの『医学教程』(1708)では、生理学が大幅に拡充され、新しい機械論に基づく生理学が述べられていた。ハラールは医学理論から独立した『生理学初歩』(1747)を著し、医学理論の枠組みは崩壊し始めた。ブルーメンバッハの『生理学教程』(1789)は生命力や形成力を前提にするロマン主義的な生理学書であり、ミュラーの『人体生理学提要』(1838-40)は実験的な研究データに基づく近代的な生理学書であった。

第2の医学実地は、疾患に診断と治療についての各論を扱うものである。その最初の著作はガリオポントッスの『受難録』(11世紀前半)で、局所性の疾患(頭から足まで)と全身性の熱病を含むもので、これが基本型となり、その後の医学実地書にも踏襲された。アヴィセンナの『医学典範』

では第3・4巻が疾患の各論を扱っている。ブルーハーフェの医学実地書『箴言』(1709)では、96疾患を列挙していたが、その配列は症状・病態に基づいていた。症状・病態別の医学実地書はその後も書かれ、さらにソヴァージュは『方式的疾病分類学』(1763)を著し、症状・病態に基づいて疾患を植物と同様に系統的に分類した。疾病分類学は一世を風靡したが、19世紀に入ると疾患を器官系統別に分類する形の疾患各論書が書かれるようになった。

第3は解剖学／外科学である。モンディーノの『解剖学』(1316)では腹・胸・頭・四肢の順で解剖が述べられる。ヴェサリウスの『ファブリカ』(1543)はガレノスの解剖学と自らの解剖経験をもとに書かれ、多数の精緻な解剖図を含み大きな衝撃を与えた。その後解剖学が最先端の科学となり、ハーヴィーの「血液循環論」(1628)はガレノスの3大内臓・脈管説を崩壊させた。18世紀のウィンスローの『人体構造の解剖学示説』(1732)は機能的推論を排して人体構造のみを記述した。19世紀にはケリカーの『人体組織学提要』(1852)が組織学を体系化し、ヘンレの『人体系統解剖学提要』(1855-71)は人体を器官系に分ける系統解剖学を作り上げた。

第4は植物学／薬剤学である。古代から薬剤の主役は植物薬であり、ディオスコリデス『薬物誌』(50-70)は広く用いられ、図入りの薬草書としてフックスの『薬草誌』(1542)が現れた。16世紀中葉から各都市で薬局方が編まれ、また薬草園・植物園が各地に作られた。ポーアンの『植物劇場目録』(1623)は自然界の植物を網羅して名前を整理し、リンネの『植物の種』(1753)は雄しべに基づく自然分類を作り上げた。薬効成分の抽出は19世紀初頭から、化学合成薬は19世紀末から

始まった。

江戸時代までに渡来した西洋医学は5期に分けることができる。第1期の南蛮医学(1555-)ではポルトガル宣教師が来日して外科の診療を行い、外科学が伝わった。第2期の紅毛流医学(1649-)では長崎の出島においてオランダ人医師から外科学が伝えられた。第3期の『解体新書』以後の蘭学(1774-)ではオランダ語の医書が翻訳され、解剖学を始めて医学実地書、外科学書、薬剤書が伝えられた。第4期のシーボルト以後の蘭学(1823-)ではこれらに加えて生理学書も翻訳された。第5期のボンペの医学(1857-)においては、18世紀までの4教科の枠組みから基礎医学と臨床医学に再編成され、解剖学、生理学、疾患総論、疾患各論、外科学などが伝えられた。

ヨーロッパの医学は古代ガレノス以来の体液説に基づいていたが、18世紀頃から変化が始まり、19世紀になって大きく変革した。それまで医学教育の中心であった医学理論と医学実地を含む4つの教科の枠組みが崩壊し、解剖学、生理学、疾患総論・各論、外科学といった近代的な形に再編成された。また生理学の理論も、古代以来の体液説から18世紀初頭に機械論に、18世紀末にロマン主義に、19世紀中葉には実験生理学へと変わった。西洋医学は16世紀中葉以後に日本に渡来したが、18世紀末～19世紀前半にはおもに書物を通して、その時期に変革しつつある医学が伝えられ、古代以来の体液説に基づく医学理論は伝わらなかった。幕末(19世紀中葉)にはオランダ人教師を通して19世紀前半に新たに再編成された形の西洋医学が受容され、それ以前に書物を通して受容した医学は時代遅れのものとなった。

(平成28年12月六史学会合同例会)